

インバート・ハート

宝樹 優

十月中旬。HRが終わり、下校のチャイムが鳴った時にはすでに、窓の向こうは暖かな橙色に包まれていた。生徒が次々に学校を離れて、橙色に溶け込んでいくのが見える。多くの生徒が帰っていく中、日直だった僕と井上さんは二人、教室に残って掃除をしながらその様子を眺めていた。「そろそろ終わりにしようか。ゴミは僕が捨ててくるから、井上さんはもう帰ってもいいよ」

僕がそう言うと、井上さんは小さくうん、と頷いた。

「それじゃあ、また明日」

「……また明日」

彼女がそう呟いたのを聞いてから、僕は教室を出た。

五分ほどでゴミ捨てを終え、僕は教室に戻ったのだけど、その時まだ彼女はそこにいた。

「まだ帰ってなかったんだ。どうかしたの？」

「忘れ物を取りに来ただけ。もう帰るから。さよなら」

「あ、うん、さよなら」

彼女は僕の返事を聞き終わるか終わらないかのところ

私は貴方が嫌いです。

私がおかにも悩んでいると、どこからともなく現れて、私を笑顔にしてしまう、だから貴方が嫌いです。

私は貴方が嫌いです。

貴方が視界に入るだけで、私の心は掻き乱される、だから貴方が嫌いです。

私は貴方が嫌いです。

ただ何気ない日常会話をしているだけで、私の心を満たしてしまう、だから貴方が嫌いです。

私は貴方が嫌いです。

何の脈絡も無しに、いつの間にか貴方のことを考えてしまう、だから貴方が嫌いです。

私は貴方が嫌いです。

私のことを誰よりもよく知っていて、私の小さな変化にすぐに気付いてしまう、だから貴方が嫌いです。

私は貴方が嫌いです。

貴方が視界に入るだけで、貴方を思い浮かべるだけで、私は私でいられなくなる、だから貴方が嫌いです。

私は貴方が嫌いです。

私に見せてくれるよりも、眩しい笑顔を周囲に見せる、そういう貴方が嫌いです。

私は貴方が嫌いです。

で、足早に教室を出て行った。

僕も帰ろうと、荷物を整理しようとして、机の上に通の手紙が置いてあるのに気付いた。さっき見た時にはなかったと思うのだけれど……。僕は不思議に思っただけでゆっくりと封を切った。

『私は貴方が嫌いです。』

常に真っ直ぐ前を向いている、そんな貴方が嫌いです。

私は貴方が嫌いです。

間違ったことを放っておけない、そんな貴方が嫌いです。私は貴方が嫌いです。

どんな時でも冷静に行動できる、そんな貴方が嫌いです。

私は貴方が嫌いです。

どんな相手にも敬意を払える、そんな貴方が嫌いです。

私は貴方が嫌いです。

誰に対しても優しく接する、そんな貴方が嫌いです。

私は貴方が嫌いです。

他人のために必死になれる、そんな貴方が嫌いです。

私は貴方が嫌いです。

今の私に足りないもの、私が憧れ、なんとしてでも欲しいもの、それを全て持っている、眩しいくらいに光輝く、そんな貴方が嫌いです。

私と話している時より、楽しそうに誰かと話す、そういう貴方が嫌いです。

私は貴方が嫌いです。

私には貴方が必要なのに、貴方には私は必要ない、そう思ってしまうような、そういうあなたが嫌いです。

そして何より、こんなに貴方を想っているのに、いつまで経っても素直になれない、こういう私が、私は一番嫌いです』

読み終えてすぐに、僕は窓の外を見た。そこには、橙色の中へと消えていく一つの人影があった。僕は勢いよく窓を開けて叫ぶ。

「井上さん！」

すると彼女の足がピタッと止まって、ゆっくりとこちらを振り返る。

「手紙、ありがとう」

僕はそう言って、その手紙を掲げる。

「僕は、こういう貴女が、世界で一番好きです！」

それまで橙色に照らされて朧げだった彼女が、この瞬間だけは、はっきりと僕の瞳に映った。

この時の彼女の表情は——僕だけの宝物にしておこう。